

0. 日本語を俯瞰して考察する

日本語についてより客観的に考察できるようにするため、歴史の観点から考察します。

1. 音声の観点からの日本語の歴史

(1) 日本語のルーツ

日本語のルーツはよくわかっていません。日本語の系統については、かつてはウラル・アルタイ系と分類され、ウラル・アルタイ系という分類がウラル系とアルタイ系に分かれると、日本語はそのいずれかに分類されるという研究が多くなり、いずれにも属さない孤立した言語と分類されることを経て、今では日琉語族とされるようになりました。

(2) 日本語の文字の歴史

当初の日本語には文字がありませんでした。言語が文字を持たないことに違和感があるかもしれませんが、世界の言語のなかで、文字を持つ言語はかなり少数で、文字を持たない言語が大多数です。日本人の身近なところでは、アイヌ語には文字がありません。日本語の仮名やローマ字を用いたアイヌ語の記録が発見されているものの、定まった表記法がないことから、アイヌ語には文字がないといわれています。ちなみに、日本で入手できるアイヌ語の文法書には片仮名やローマ字を用いてアイヌ語が書かれています。

文字がない言語であっても、時と空間を越えて知識を共有させるために、文明が文字を求める場合があります。日本語の場合は中国から漢字を導入することにし、漢字と中国におけるその読みを導入し、元々の日本語である和語(大和言葉)と結びつけました。例えば、中国の漢字の「山」とその読みから由来する「サン」の音を導入し、それらを和語の「ヤマ」と結びつけました。前者を音読み、後者を訓読みといえます。しかし、結果として「山」の読みが「サン」と「ヤマ」の二通りとなり、前回に書いたとおり、漢字の導入のしかたが日本語の表記体系を複雑にしてしまった原因となりました。

さらに、漢字の意味を離れて、中国における漢字の音に由来する音のみと和語の音とを結びつけるようになり、漢字で日本語の音をあらわすようになりました。これを万葉仮名といいます。「仮名」といっても、表記は漢字です。この万葉仮名が平仮名と片仮名のもととなりました。万葉仮名と音の結びつきについては「たのしい万葉集(Tanoshii Manyoshu)」(<https://art-tags.net/manyo/>)の、「万葉仮名、カタカナ、ひらがな一覧表」に詳しく掲載されています。

これら万葉仮名の一部を切り取って文字にし、音を結び付けたものが片仮名です。万葉仮名の一部を切り取るという形態から「不完全な仮名」という意味でカタカナといわれるようになりました。これにより、万葉仮名では一音に複数の漢字が当てられていたのが、一音に片仮名一文字という一対一対応となり、書きやすく、わかりやすくなりました。また、万葉仮名をさらに崩したものが平仮名となりました。

日本語にはこれら3つが併存していましたが、幕末から明治期にかけて、漢字を完全に廃し、仮名だけにすべきという主張や、漢字も平仮名も片仮名もすべて廃して、日本語はローマ字で表記すべきという主張がなされるようになります。前者の代表は郵便制度を整備したことで知られる前島密で、後者の代表はドイツ啓蒙学者の西周です。結局、福沢諭吉が漢字の数を減らしながらも漢字を残すことを主張し、それが現在も残る「常用漢字」のもととなりました。

(3) 五十音と日本人

日本語の仮名の表を五十音図や五十音表といいますが、古来より、日本語の五十音のそれぞれに

日本古来の五十の神々が宿り、音が霊力を有することから、日本語の五十音は、宇宙の根本原理を表し、その五十音を物質界に表したのが精神と物質の理(ことわり)の根本である言葉であることから言霊(ことだま)の考え方があります。また、五十から成る音と邪を祓う力を有すると考える鈴の音とを重ねて五十鈴(いすず)といわれ、この五十鈴を鳴らすのが神社の鈴(本坪鈴)で、これらの神々を祀るのが神宮(伊勢神宮)です。内宮と呼ばれる皇大神宮内を五十鈴川が流れますが、いすゞ自動車はその川を名前の由来としています。音が霊力を有するという考えに違和感を持つ人も少なくないでしょうが、現代の日本でも、言霊は姓名判断の基本となるものですし、実際には日本の精神世界に根付いている考え方です。

JOY SOUND の「カラオケ・歌詞検索」(<https://www.joysound.com/web/search>)によると、タイトルに「言霊」を含むのは24曲、歌詞に「言霊」を含むのは243曲あり、この曲数とそれらの歌詞は「言霊」が日本に浸透していることを示す一例です。もっとも、言霊の考え方は日本に限らず、他の地域にもあらわれます。

2. おすび

今回の記事は音声学や称呼との関係が薄い印象があるでしょう。しかし、意外にも、日本古来の五十鈴の概念が音声学と共通する部分も多くあります。次回にそのことについてとりあげます。